NEXUSYS 11

THE ELEVENTH BODY

He remembered dying. Nothing after.

BOOK I

第 3 章　民間技術の例外

THE CIVILIAN EXCEPTION

研究所は、研究所だとは宣伝していないビルの六つの階を占有していた。通りに面した窓には法律文書の翻訳、農業予測値の補正、人間の受付係の短期貸与といったサービスが掲げられている。案内板の下の小さな銘板にだけ、こうあった。明州マテリアルズ＆モーション。民間研究免許。独立系の生体運動材料検査。

受付のガラス越しに女が市民認証情報を要求した。ロイは持っていないと答えた。女は雨に濡れたコートを見、それから出口の上のカメラを見た。これで話は終わる、と彼は思った。だが女は半透明の端末を二人の間に置き、別の入力欄を選んだ。

「分析を頼みたい」

「何の分析ですか」

「俺のだ」

女は入力欄を閉じた。耳の後ろの小さな環状灯が緑から琥珀色へ変わった。何かが別の何かへ照会を送りつけた。壁の中でリレーが乾いた音を立てる。拒絶一つにも、いまでは証人の連鎖が付属するのだ。

「医療サービスは南へ二街区です」

「あそこには必要な計器がない」

「では認可された軍用システム診療所へ」

「安全ではないと聞いた」

女はじっと彼を見た。「誰にとってですか」

ロイは答えなかった。女の視線が、袖から露出した手首へ移った。指を曲げると、皮膚の下で微細な整然とした模様が動いた。氷の下で魚が一斉に向きを変えるように。女は親指で琥珀色の灯を消した。

「そこでお待ちください。エレベーターには近づかないで」

ロイは人工義肢の五世代を示す政府のポスターの下に座った。どの義肢も、その義肢を所有する人間より清潔そうだった。標語は〈標準部品、標準の生命〉。高価なコートを着た盲目の男がエレベーターから現れ、ガラス戸に触れることもなく出ていった。彼が通り過ぎたとき、床の奥深くで生まれた振動がロイの足裏を貫いた。

試しに片足を持ち上げる。振動は弱くなった。足底を床へ戻すと、再びやって来た。到着する人間がエレベーターの扉を開ける前に、圧力として知らせてくる。建物のモーターと足音、足音と血流、血流と壁内のデータ伝送を、彼は分離できた。どの区別も、意識して教わった覚えがない。

白い民間研究免許の襟章を着けた男がロビーへ出てきた。シャツの袖口は外されている。受付係より年上で、目の年齢よりは若い。折り畳み式の診断ルーペがこめかみに載り、左手があるべき場所には継ぎ目のない淡い義手がついていた。

「シェン博士です。身体を測ってほしいそうですね」
「設計寿命が知りたい」
「大抵の患者は、ちゃんと動いているかを尋ねます」
「動いている」
「それは必ずしも同じ問いではありません」

シェンは登録表示を眺め、それを不透明な紙で覆った。「匿名の材料調査。それなら私の権限内です。ただし臨床上重大なものが発見された場合、機械が結果を秘密にしてくれるとは保証できません」
「そうなる前に教えてくれるか」
「いいえ。そうなった後でしか教えられません」

ロイは彼について階上へ向かった。

検査室にベッドはなかった。絶縁台の上に椅子があり、可動式の計器が環状に配置されていた。見覚えのある企業の装置もあれば、新しすぎてロゴの文字が動いて見えるものもある。奥の窓は回収水処理施設の屋根を見下ろしていた。機材の振動が窓ガラスを微かに鳴らしている。

「独自の遮断フィールドを置いているな」

「受動的な干渉制限です。商業機密のためですよ」

「政府のドローン対策か」

「政府のドローンにも顧客がいますから」

シェンは密封容器を持ち上げた。「血液を採ります」

ロイは腕を伸ばした。最初の針は先端が折れ曲がった。シェンはそれを見ても何も言わない。二本目は一ミリも入らず、内部から抵抗が増して押し返された。突然装甲板が出現したのではない。組織そのものが穿刺を拒むと決定したようだった。

「あなたがやったのですか」

「わからない」

「その答えには慣れておいたほうがいいでしょう」

三本目の針が、固まらない銀色の細い液糸を引き抜いた。卓上灯の下では、その小滴が髪の毛一本分ほど重力に逆らって動くように見えた。シェンは試料を透明なカートリッジに閉じ込め、指でつまんだ。彼の義手を覆う素材がかすかに震えた。

「導電性ポリマーか」

「違います」

「懸濁液？」

「産業用途で言う意味なら、違う」シェンは浅く息を吸った。「問いを与えると相を変えるのです」

分光分析台で細い光が液体を貫くと、複雑な干渉縞が格子状に現れた。機械は計測結果を返し、それを捨て、別の基準化学物質を要求した。シェンは軍用材料ライブラリを選んだ。分類不能。医療用の生体材料群も選ぶ。分類不能。そのたびに装置は、ますます確信を持った文体で自らの無知を報告した。

「なぜ軍用素材だと思う」ロイが訊いた。

「民間の生体技術はここまで速く反応しません。腕の周囲の組織には、再構築があれば残るはずの瘢痕がない。この試料は、認識できる燃料もないままカートリッジの中で仕事をしています。それに、あなたの反射速度は私の測定系を待たない」

「危険なのか」

「説明書のないものは何でも危険です」

シェンは液体を微小流路の迷路へ移した。小さな弁の列が経路を交互に切り替える。最初は銀色の成分も圧力勾配に従った。次に、それを予測しはじめた。機械的な遅延の可能性を排除するため計器は周期を落とした。それでも応答は続いた。ただし、試験を重ねるうちに応答の鮮明さがわずかに失われた。

シェンは装置を止めた。

「燃えたのか」とロイ。

「正確には違います。活性媒体の一部が、採取時と同じ形では回収不能になりました」

ロイは、自分の身体についての理解が不快なほど精密になっていくのを感じた。その異常な能力は無料ではなかった。研究室がいま消費したものは、休息しても戻ってこない。

「俺にはどれだけある」

「正体がわからなければ答えられません。そして今では、二つ目の試料で確かめるべきかどうかも疑わしい」

シェンは椅子の方へ移動した。「あなたを分解しなくても答えられる普通の問いはあります。そこから始めましょう」

ロイの首と胴体に非接触プローブを配置する。画面には神経があるべき場所に神経が描かれた。だが解剖図の下に第二の領域が現れた。独立した時間系で作動する導管の網。ロイが息をするたび、その接続形状が変化していく。装置は候補を三つ示し、それから四つ目を加えた。シェンはその画面を向こう側へ回した。

「言え」とロイ。

「信頼できる結果はまだありません」

「四つ目は何だ」

「エラーです」

「名前のついたエラーか」

シェンはルーペを外した。「私は古い産業用筐体、神経置換インプラント、市のサービス労働者、契約による三種類の軍用救難シャーシを見てきました。あなたの身体は、そのどれでもない。全部に似た箇所があります。だからなおさら厄介です」

計器が骨格の内部図を描き上げた。骨髄の下には密度の高い微細孔の格子があり、材質の傾斜は、成形済み部品を組み合わせたとは思えないほど滑らかだった。手首では張力繊維が回転する部材を編み込み、応力の分配点を自発的に変更している。ところが肋骨の下の一点だけ、周囲の工学水準から取り残されたような取り付け構造が残っていた。

「なぜこれは交換されていないんだ」博士は独り言のように言った。

「何だ」

「取り付けインターフェースです。ほかの部位より何世代も古い。組織に隠れてメーカー刻印も読めません」

「取り外せるか」

シェンは、ロイが背骨を一本抜こうと提案したかのような顔をした。「この部屋では無理です。好奇心を満たすためだけには、なおさら」

「寿命は？」

生物学的年齢の画面が開いた。組織再生は正常。しかし基準値のない指標がある。別の指標は細胞の成熟度に合わない更新速度を示した。軍用テンプレートなら推定耐用期間を、民間用なら臓器の生存率を提示する。どちらも最終欄を埋められなかった。画面に残ったのは、ひとつの冷たい単語だった。

UNKNOWN。

「無期限に生きられるということか」

「寿命推定システムが、あなたをどの種類の問題として扱えばよいか知らない、という意味です」

「誰かが俺を造った。保守予定があるはずだ」

「保守予定と死刑宣告は別物ですよ」

壁の十二のグラフは規則正しく動きつづけた。ロイの脳裏に部屋が戻ってきた。タイレルの巨大な居室。老人の目。そして、設計された生命は、終わるようにも設計できるという知識。ロイは顔色を変えなかった。シェンは、その沈黙に意味があると判断する専門家特有の注意深さで彼を見ていた。

「最も古い記憶は？」

「そのために料金を払うんじゃない」

「まだ一銭もいただいていません」

「なら、誰がお前に払っている」

二人の間の沈黙の質が変わった。シェンは受付係から停止中だと説明された室内カメラへ一瞥を投げた。壁のリレーが再び鳴った。今度は二度。ひとつは室内の近く、もうひとつは階下。データ交換が完了したのだ。

シェンは不自然なほど何気ない声で訊いた。「この施設をどうやって見つけました？」

「技師に住所をもらった」

「名前は」

「ハン」

シェンの表情が硬くなった。「警告しておくべきでしたね、彼は」

「何を」

「医者が検査を終える前に、システムは異常を分類するのです」彼は表示装置を内側へ向け、補助計器への電力を断ち始めた。「受付で自分を登録するよう求められましたか」

「登録できないと言われた」

「すると建物はあなたを器具として登録した。未知の構造、独立した認知能力、所有者なし。この三項目で保全通知が出る。私が承認したかは関係ありません」

「保全か」

「物体に価値があるかもしれないとき、連中はそう呼ぶのです」

天井スピーカーが柔らかく鳴り、市の音声が検査区画を優先監査へ切り替えたと告げた。二人とも動かなかった。

「どれくらいだ」

「到着までなら、通知はもう出ています。身元の特定までなら数分かもしれない。私があなたと話したとわかるまでなら、もっと短い」

シェンは引き出しから紙片を取り出した。住所を送信しないためだ。座標格子と、七本指の手を描いた古風な印章が印刷されている。「私はこのインターフェースを見なかった。試料も見なかった。機材の故障と記録します」

「俺が何者か教えられるのは誰だ」

「われわれの免許が禁じる作業を引き受ける者です。身体を財産の分類だとは考えない人間」

「闇医者か」

「専門家です。違いはあります。法律が消してしまっただけで」

「どこだ」

「東側高架橋の下の修理回廊から始めなさい。七本指の印を探して。機械には見せてはいけません」

ロイは紙を折りたたんだ。シェンの背後の端末には銀色の液体の未完了分析が残っている。化学組成の不確実性を並べた行の下に、機械が一つの記述を追加していた。

NONSTANDARD ELECTROACTIVE TRANSPORT / SELF-OPTIMIZING。

非標準電気活性輸送体。自己最適化型。

廊下に人影はなかった。主エレベーターは検査サイクルに入ったため、シェンは保守階段へ案内した。立ち去ろうとするロイの袖を博士がつかんだ。

「もう一つ。残りの寿命を訊きましたね。あの反射を与えているものは、必要なとき以外使わないことです。検査中に媒体は変化した。身体全体で見れば無視できる損失かもしれない。でも、待てば戻るという種類のものではありません」

ロイは清潔な腕の皮膚を見た。「なら、ただでは使わない」

「この街では妥当な原則です」

ロイは階段へ入った。六階下のロビーでは、市の音声が、サービスは中断なく継続しているとまだ客に保証していた。

＊　＊　＊

検査室と東部地区の政府処理クラスターの間には、二百キロメートルの行政用光ファイバーが通っていた。記録は一秒の何分の一かで届き、十四秒間待たされた。分類サーバーが優先度の再編成を受けていたからだ。その遅延こそ、都市に残された数少ない偶然の一つだった。

異常な人工構造。

民間スキャン送信元：明州マテリアルズ＆モーション。

所有者：なし。

稼働寿命：未解決。

サーバーはデータを統合人工生命登録簿へ送った。登録簿は次第に古くなる分類法を順番に適用した。新しいシステムは自分を完全だと信じたがる。しかし最も敏感な経路ほど、誰も維持しない古い定義に依存していた。ひとつの規則が、何世代も前の製造方式との部分的な一致を検出した。

その規則は個体を識別しなかった。証拠を破壊してはならない、と命じただけだ。

原構造を保全せよ。

局長級部門へ回付。

同時刻、深圳の別の場所では、自律検査ユニットが天井の格納架から降りて歩行者の流れに入った。皮膚はありふれた民間取締用シャーシに似せてある。だが光学系は普通ではない。汚れたガラス越しに得た反射情報から神経応答を推定する倍率補正機構が組み込まれていた。

二機目は運河沿いを音のしない関節脚で進む。上空のドローンの航路は目に見えるほど変わらなかったが、収集データは研究所へ収束しはじめた。

なぜ未知の人物が重要なのか、どの機械も知らなかった。理由を伝えられなくても、ネットワークは追跡できる。

＊　＊　＊

岡京。かつて鉄道駅だったものを中心に官庁街が建設され、ホームはとうの昔に省庁の壁の内側へ閉じ込められている。そこで川村という男が自治体の交換義体に関する報告を読んでいたとき、机の端に古い優先指標が灯った。

割り込みそのものには驚かなかった。文面に驚いた。

LEGACY EXCEPTION / SYNTHETIC SUBJECT。
旧世代例外／人工生命個体。

指で触れると見慣れた寸法一覧が現れ、それから、どの区分にも還元できない材質プロファイルが表示された。採取した痕跡には明らかに旧式の形状を持つ装置インターフェースの断片が含まれている。その周囲だけ、身体の他のすべてが別の時代からやって来たようだった。

専門的な懸念を表現できるよう顔を設計された男性型ヒューマノイドの補佐官が、軍の回収局へ警報を送るべきか訊いた。

「いや」と川村。
「管轄内の案件ですが」
「管轄は分類に従う。まだ分類されていない」
「軍局は致死的封じ込めの予備要請を出しています」
「却下しろ」

補佐官は人間には見えない程度の時間、躊躇した。「大臣室が説明を要求する可能性があります」
「なら説明してやる。回収ユニットを二機。公開作戦も弾道兵器も使うな。対象を深圳セントラルから出すな」

川村は古い取り付けインターフェースの像を拡大した。ずっと以前、同じような比率の構造を持つ研究提案が彼の机を通過した。費用見積もりは水管理予算の中に隠されていた。その提案には、本来なら生存可能年数の延長を目指すはずだった、ある女性研究者が関係していた。

彼はその研究に資金を提供した。後に、その残余を回収せよと命じられた。どちらの仕事も、彼が満足できる形では終わらなかった。

「室長、製造元の見込みは？」と補佐官。
「製造元ではない」と川村。「系譜だ」

彼は共有分析系に出ている診断報告を閉じ、私設アーカイブを開いた。クラウド計算は不要だった。最古のファイルは静止画像へ変換され、国家の日常判断を執行するエンジンの外に保管されていた。

その一枚に、実験室のガラス越しに撮影した解像度の悪い顔が映った。下には名前があった。川村は声に出さなかった。

軍の回収局から現在のスキャンへのアクセス権を取り上げるよう、補佐官へ指示した。

「大臣へ報告しますか」

「身元不明の器具についてか。まだだ。大臣は結果を好む」

「民間研究所は？」

「職員を聴取するまで免許は維持しろ。国家がすでに自分たちを断罪したと思えば、人間は非協力的になる」

補佐官が去った後、川村は机の上で回転する不確かな構造を眺めた。システムはそれを青い抽象として描画している。骨のない骨、神経のない神経。死んだ技術に由来する、わずかな生き残りの形。彼は画像を古いハードウェアの断片だけに縮小した。

それを生んだ企業が消滅しても生き残る知識がある。逆に、都市全体を設計し直せるほどの知能を持つ機械と、資金と人員を与えても、政府が再現できなかった知識もある。物質は複製できるかもしれない。だがその物質を使う理由は、必ずしも複製できない。

川村は、その考えをどの装置にも送信しなかった。

＊　＊　＊

ロイが東側高架橋へ着いたころ、午後は使い古された鋼の色になっていた。交通の上を飛ぶドローンの音は聞こえる。だが、自分への新たな関心と街の通常の貪欲さを区別できなかった。ポケットには紙片があり、身体の中には修正された収支勘定があった。

医者は寿命に名前を与えられなかった。しかし、一つの回復不能な支出は証明した。

低い保守レールを走る機械が、前方の路地の口を横切った。止まり、彼にセンサーを向け、何も見つけなかったかのように進んだ。ロイの皮膚の下で動きが始まった。準備運動のような緊張。意識して選ぶには速すぎる。彼は足を止め、動こうとする衝動を押さえた。

衝動が引くまで待った。筋肉の中に埋め込まれた何らかの知性は、問題を突き抜けて解決することを好んでいた。頭の中の知性はそれより古く、苦く、慎重になりつつあった。そして、その代価を疑い始めていた。

高架橋の上の国営ディスプレイが、合成人工労働者の制度調和について最新の提案を流していた。公平な稼働期間、確実な更新、共通の行政的時間軸の必要性。〈六年標準〉という語が、脚注にも見えるほど小さな文字で下の方に現れた。

ロイは二度読んだ。六年で十分かと、当事者の誰に尋ねたのか、壁面は一言も説明していなかった。

交通のはるか下に修理回廊の入り口が見えた。半透明のカーテンの奥に幾十もの店が積み重なり、露出した義肢関節の上を橙色の光が走る。溶剤の蒸気が雨の中へ逃げていく。手書きの札には、すべての診断作業はクラウド接続なしで行う、とあった。

ロイは階段を降り、修理市場の騒音に包まれた。深圳へ来たのは、自分を復活させた人物の名前を知るためだった。代わりに国家が自分に気づいたことを知り、誰にも説明できない物質が体内にあると知り、階段を一段降りるだけで未知の何かを少しずつ使い潰しているのではないかと疑うようになった。

回廊の揺らぐ橙色の光の中で、修理工が子供に、指の二本欠けた義手の調整を教えていた。子供は、機械の指にも失ったものを赦す方法があると信じているかのように、その動きを見つめていた。

ロイは七本指の印へ向かった。背後の高架橋では監視ユニットが庇の下で立ち止まり、降りていく階段に顔を向けた。

都市の機械は、なお証拠を集め続けていた。そして今、都市の外のどこかで、一人の男がその証拠を読み始めていた。